

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2021 年 5 月 25 日 (Vol.165) 「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句-其ノ五 石薬師(三重県)から京師(京都府)まで」

「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句-其ノ五 石薬師(三重県)から京師(京都府)まで」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige55 kyoto.jpg 東海道五拾三次之内 終点 京師(けいし)

歌川広重『東海道五拾三次』の五回目です。

今回は石薬師(三重県)から終点の京師(京都)まで紹介します。

すべて陸路で、旅人がその足で踏みしめる東海道そのものがメインテーマとなっています。

46.「庄野」では夏の夕立ちを、47.「亀山」では雪の朝を描くなど四季や時間の描写も魅力です。

また、45.「石薬師」、49.「阪之下」では遠近表現に工夫を凝らしています。 そして、いよいよ京都に到着です。

旅人たちは百二十余里(500km弱)を二週間ほどでたどり着きました。

当メルマガは昨年九月二十九日から約八ヶ月かかりました。

今回は現在の三重県鈴鹿から京都までの旅をお楽しみください。



45. 石薬師 (いしやくし) 石薬師寺



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige45 ishiyakushi.jpg 東海道五拾三次之内 四拾四番目 石薬師(いしやくし)

宿の名の由来となっている石薬師寺は参勤交代の大名も道中の安全祈願をした古刹で、弘法大師・ 空海が彫った菊面石(きくめせき)の薬師如来像を本尊としています。

田んぼの中の畦道を斜め上に行くと石薬師寺の正門で、その前を馬子が客を乗せた馬を引いて過ぎて 行ってます。

その馬子たちが歩いているのが東海道です。

寺から右手、屋根が連なっているのが宿場で、その周辺には秋の収穫後の風景が描かれ、田で働く農 夫たちは秋にふさわしい静けさを醸し出しています。

寺の背後には緑がかった灰色の山が姿を見せ、その右手後ろは灰色の山、さらに最遠景として藍色の 山が描かれ、三段に重なる鈴鹿の山々が画面に奥行きを持たせるとともに秋晴れの空の透明感を描き 出しています。

日本の浮世絵の影響を強く受けたフィンセント・ファン・ゴッホ (1853-1890) の作品に『タンギー 爺さん』があります。

その背景には広重のものをはじめとして6点の浮世絵が描かれ、右上部分に広重の『五拾三次名所図 会』の「石薬師」の「桜」が描かれています。

南無薬師薬の事もきく桔梗

炭大祇(たん たいぎ) (1709-1771) 季語<桔梗(ききょう)>で初秋

46. 庄野 白雨(はくう)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Utagawa Hiroshige (the first) - Shono from the Fifty-three Stations on Tokaido Highway, Hoeido version - Google Art Project.jpg 東海道五拾三次之内 四拾五番目 庄野 白雨(はくう)

『東海道五十三次』保栄堂版を代表する傑作です。

「白雨」とは夕立や俄(にわか)雨のことです。

墨色の一文字ぼかし※が暗雲たれこめる突然の天気の崩れを物語り、雨は右からの風にあおられ斜め に降りそそぎ、左肩あがりの坂道と交差しています。

竹は弓なりにたわみ、二重に重ねた竹林のシルエットは強い風雨を印象づけています。

篠突く雨の中、坂道を登ってゆくのは菅笠(すげがさ)に莚(むしろ)をかぶった男と客を乗せた二 人の駕籠かき。

駕籠かきは客が濡れないように合羽(かっぱ)を駕籠の上からかけています。

合羽のすき間から見える客は急な坂道と激しい風雨による揺れに耐えようと、ぐっと左手を握りしめ ています。

これに対し坂を下ってくる二人のうち、鍬をかつぐ男は近所の農夫でしょう。

農夫が大股で下っているのに対し、番傘をさす男は向い風にあおられてなかなか足を運べていません。 すぼめた傘と小さな歩幅が風の強さを物語っています。

※「一文字ぼかし」とは浮世絵版画における摺りの技法の一種で、一の字を引いたようなぼかしで、 ぼかす色で時間・季節・気候などを表現します。

翠巒を降り消す夕立襲ひ来し (翠巒=すいらん、緑色の峰や山々のこと、夕立=ゆだち)

杉田久女(すぎた ひさじょ) (1890-1946) 季語<夕立>で三夏



47. 亀山 雪晴 (ゆきばれ)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige47 kameyama.jpg 東海道五拾三次之内 四拾六番目 亀山 雪晴(ゆきばれ)

一つ前の「庄野」では夏の夕立にあって走り出す人々の躍動感を描いていましたが、ここ亀山では、 降り続いたであろう雪が止み、よく晴れた冬の朝の静寂な情景が描かれています。

構図は雪の白と淡い墨を基調として画面を右肩あがりの対角線で二分しています。

画面上部の青の一文字は冷たい空気を伝え、画面左の遠景の山は朝焼けでほんのりとピンク色に染ま り雪景色に彩りを添え、家並みの屋根の重なりは風景の奥深さを演出しています。

画面中央から右上は雪で凍てついた亀山城の京口門の壮麗さを表し、急な斜面にそびえ立つ二本の松 が構成上での大黒柱の役割を果たしています。

城に向かう急な城を大名行列が木々の間に見え隠れしながら登っていっています。

当シリーズの No.11「箱根」No.33「白須賀」でも山道になかば隠された大名行列を描いていますが、 ここ「亀山」ではその姿を透かし見せています。

しかし、モノトーンの画中にくっきりと青・茶・黄の色でアクセントをつけています。

眠る山今かがやくや雪晴れ間

高浜年尾(たかはま としお) (1900-1979) 季語<雪晴>で晩冬

48. 関本陣早立 (ほんじんはやだち)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige48 seki.jpg 東海道五拾三次之内 四拾七番目 関 本陣早立 (ほんじんはやだち)

本陣とは大名や公家など身分の高い人が宿泊、休息した場所です。

参勤交代制度の実施には欠かせないもので、苗字帯刀(みょうじたいとう)を許されているようなその土地の有力者の家などがあてられていました。

この図は関宿の本陣に宿泊した大名一行が、まだ夜の明けきらない時間に出発するあわただしいさまを描いています。

張りめぐらせた幔幕は緊張感を作り出し、手前の裃(かみしも)の男はこの本陣の主人とみられ、や や硬い表情で提灯(ちょうちん)を持つ男に指示をしています。

その手前の三人の奴(やっこ)は出発前ですがくつろいだ雰囲気です。

立場の違いで人物が見せる一瞬のしぐさをとらえています。

右手前の青竹に掲げられているのは、宿泊している大名の名を書いたものです。

幔幕と手前の提灯には「田」と「中」を組み合わせて円で囲んだ紋所が使われています。

これは広重の父方の実家の姓「田中」を図案化したものです。

また、幔幕の内側には「仙女香」や「美女香」とあり、江戸京橋の化粧屋から売り出し中の白粉(おしろい)と白髪染(しらがぞめ)の宣伝札が掛かっています。

ここでは「早立ち」を詠んだ句を選びました。

早立ちの声過ぎゆけり露葎 (葎=むぐら、生い茂って藪のようになるつる草)

桂信子(かつら のぶこ) (1914-2004) 季語<露葎(つゆむぐら) >で三秋

49. 阪之下 筆捨嶺 (ふですてみね)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige49 sakanoshita.jpg 東海道五拾三次之内 四拾八番目 阪之下 筆捨嶺(ふですてみね)

室町時代に狩野(かのう)派を大成させた狩野元信が東国(とうごく)へ下る途中、あまりの絶景に納得のいく絵を描けず、ついに筆を捨てたとの伝説から筆捨山と呼ばれるようになりました。

角張った岩塊が密集した山から二筋の滝が流れ、墨を基調としながら青を挿入し、近寄りがたい神秘 の山容を中国山水を思わせる筆法で描いています。

右手にはこの奇趣に富んだ景勝を、旅人たちが茶店でひと休みしながら眺めています。

その下は谷となっていて、ここを青のぼかしで表現し、中景をあえて曖昧にすることにより、向かいに聳(そび)える山の異界的な存在を強調しています。

茶店では俳句あるいは短歌でも詠んでいるのか、軒先に吊り下げられた紙は旅人たちが残していった ものと思われます。

茶店から出て景勝に見入っている人、しゃがみこんで煙草(たばこ)をふかしながら漫然と見ている 人もいます。

その横の挟箱(はさみばこ)の天秤(てんびん)棒に腰かけている人物は、一人だけ表情を見せていません。

しかし、姿勢から山に目を奪われているのは確かです。

このような人物を描くことで、私たちを画中に引き込む術を広重は施しています。

茶店に向かって農夫らしき人物が、牛に荷物を乗せて近づき、その後を子どもがついてきています。 このような人たちの姿が、画面の雰囲気を和らげる効果も考えています。

ここでは山水を詠んだ無季自由律俳句をあげてみました。

山水、一面の巖を立琴とする

荻原井泉水(おぎわら せいせんすい) (1884-1976)



50. 土山 春之雨



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige50 tsuchiyama.jpg 東海道五拾三次之内 四拾九番目 土山 春之雨

坂は照る照る鈴鹿は曇るあいの土山雨が降る

鈴鹿馬子唄(すずかまごうた)に唄われているように、坂下(坂之下)宿付近では晴れていたのが、 鈴鹿峠を越えるころに曇りだし、土山では雨が降るというように、土山一帯は天候が変わりやすく、 土山といえば雨が連想されました。

広重は雨景表現を得意とし、どのような時節、どのような環境の中で降る雨なのか、その場にふさわ しい描き方をしています。

「庄野」では激しい夕立で雨は斜めに降りそそぎ、竹やぶはざわつき、駆け出す人びとの躍動感が表 現されています。

ここ十山では春しぐれの中、大名行列が粛々と歩んでゆきます。

画面右上から左下を広い地面とし、上に鉛色に煙る木立が、下部に大名行列と水流が描かれ、暗い色 調ですが安定した構図が穏やかさをもたらしています。

水流のほかは、大名行列すら音を立てている気配はなく、そぼ降る春の雨は繊細な墨でやわらかく摺 り出されています。

「庄野」では動を、「土山」では静をと同じ雨の景でも、これだけの違いを描きわける広重のなみな みならぬ観察力と表現力は流石と言わざるを得ません。

ここではサブタイトルの「春の雨」を詠んだ句をあげました。

しとしとと雨しとしとと春の雨

日野草城(ひの そうじょう) (1901-1956) 季語<春の雨>で三春

5 1. 水口(みなくち) 名物干瓢(かんぴょう)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido50 Minakuchi.jpg 東海道五拾三次之内 五拾番目 水口 名物干瓢 (かんぴょう)

干瓢は毬(まり)形の夕顔の実を薄く紐状にむき、農家の庭先などで干し、乾燥させるとできあがります。

水口周辺は干瓢作りが盛んで、今なおこの地方の夏の風物詩です。

画面左手では母親と二人の娘らしき三人の女性が干瓢を作っています。

左に立つ娘は赤ん坊を背負いながら夕顔の実を運んでいます。

夕顔の実を細く長くむくのは器用な技がないと途中で切れてしまうので、包丁を使っているのは熟練 した一家の主婦でしょう。

もうひとりの娘は地上に立てた棒に縄を張って、細く長くむかれた夕顔の果肉をたるませながら干しています。

左から仕事ぶりを見てゆくと、夕顔の実→むく→干すという干瓢ができる工程が連続写真のように並び、わかりやすく描く意図が感じられます。

真ん中の大きな樹は画面を引き締めるために描かれています。

街道の向かいの家でも垣根を利用して干瓢を干すのに余念がありません。

こうして立ち働く地元の女性たちと、彼女たちにはまったく関心を払わず、暑さで着物の上半分を脱いだ腹掛(はらがけ)姿で過ぎ去ってゆく旅人を対比するのは、広重お得意の表現です。

道ばたか庭かわからず干瓢乾す

森田峠(もりた とうげ) (1924-2013) 季語<干瓢乾す>で晩夏

52. 石部 (いしべ) 目川 (めかわ) ノ里



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido51 Ishibe.jpg 東海道五拾三次之内 五拾壱番目 石部(いしべ) 目川(めかわ)ノ里

東海道のように長い道中を旅すれば疲れも溜まります。

宿場間が近い場合は次の宿場で休むつもりで旅を続けられますが、宿場間の距離が長い場合はそうもいきません。

そこで、宿場間の真ん中あたりや、誰でも一服したいと思うようなところ、あるいは景色が良い場所に休息の場所が設けられ、旅人が杖(つえ)を立てて休むところから立場(建場)と呼ばれていました。

この図は石部宿よりむしろ次の草津宿に近い目川にあった菜飯(なめし)と豆腐田楽(とうふでんがく)が名物の実在した「伊勢屋」という店の賑わいを描いています。

この図と次の「草津」、その次の「大津」でもみな、名物の食べ物、それぞれ菜飯と田楽、姥(うば)が餅、走井(はしりい)餅の店が描かれています。

京都に旅したことのない江戸の人々にとってこうした図を見ながら、名物を味わう気分を想像するのは楽しみの一つであったのでしょう。

背景には比叡山が姿を見せ、京都が間近であることを知らせ、右手には歩み去って行く親子連れを配することで眺望の広がりも描き出しています。

ここでは目川の名物「菜飯」を詠んだ句をあげておきます。

箸置いて菜飯の色を賞でにけり(賞で=めで)

江國滋(えぐに しげる) (1939-1997) 季語<菜飯>で三春



53. 草津 名物立場(めいぶつたてば)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido52 Kusatsu.jpg 東海道五拾三次之内 五拾弐番目 草津 名物立場(めいぶつたてば)

東海道と中山道、さらに琵琶湖に続く矢橋道(やはぜみち)への分岐点として賑わう草津の活況が 描かれています。

その分岐点にあったのが、現在も草津名物として知られる姥(うば)が餅の店でした。

副題に「名物立場」とあるのは、この店が参勤交代の大名や一般の旅人、人足たちが休憩する茶屋を 兼ねていたからです。

姥が餅は、織田信長に滅ぼされた佐々木義賢(よしたか)の血を引く親族を養育するために、その乳 母(うば)が東海道沿いに餅屋を開き、餅を売ったのが起源とされています。

数年後、関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康が、当時八十四歳になっていた乳母に餅を献上され、『養 老亭』と書いた額を送っています。

口コミで評判が広がり、松尾芭蕉、与謝蕪村をはじめ多くの著名人が姥が餅の茶屋に立ち寄っていま す。

前景は東海道で、大きな荷を担ぐ四人の人足と五人がかりの早駕籠がすれ違っています。

早駕籠は二人の駕籠かきのほかに前曳(まえび)きと後押し、さらに横で声をかけ歩調を合わせる五 人からなっています。

客は天井から下がった綱をしっかりと握りしめ、駕籠のスピードと揺れが伝わってきます。 ここでは蕪村がこの茶屋で詠んだ句をあげておきます。

東風吹くや春萌ゑ出でし姥が里(東風=こち)

与謝蕪村(よさ ぶそん) (1716-1784) 季語<東風>で三春

5 4. 大津 走井茶店 (はしりいちゃみせ)



<u>https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido53 Otsu.jpg</u> 東海道五拾三次之内 五拾参番目 大津 走井茶店 (はしりいちゃみせ)

琵琶湖の南に位置する大津宿は東海道の中でも最も大きな宿場で、周辺の産物は船で大津まで運ばれ、それを牛車(ぎっしゃ)で大消費地の京都まで輸送していました。

この図では、牛の負担を軽くしてやるためか、日除(ひよ)けのような幌(ほろ)をつけ、米俵を積んだ牛車を先頭に、薪(まき)を積んだ牛車を二台つなげています。

農夫らしき男は、最後尾の牛を気にして振向いていて、こうしたことを描き込むことで画面に余韻を 出しています。

当時、京都の市中の輸送には牛がよく使われ、対して江戸は馬を利用することが多かったようです。 牛車はこの地域を象徴するモティーフで、東海道の旅が京都の直前までやってきたことを感じさせて います。

左手の茶店の前では餅の由来となった走井から清水がこんこんと湧き出し、魚屋はその冷水を使って 魚を冷やしています。

古来より甘味を帯びたこの湧水は季節を問わず枯れることなく、街道を行き交う人々に愛されてきました。

ここではこんこんと湧く清水を詠んだ句を選びました。

石工の鑿冷し置く清水かな(石工=いしきりと読みます。鑿=のみ)

与謝蕪村(よさ ぶそん) (1716-1784) 季語<清水>で三夏



55. 京師(けいし) 三条大橋 京師は京都のことです。



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige55 kyoto.jpg 東海道五拾三次之内 終点 京師(けいし) 三条大橋

江戸、日本橋を出発した長い旅もいよいよ京都に到着です。

広重は『保永堂版』の完結にあたり、もっとも京都らしい風景である三条大橋と背後の東山三十六峰 を描き、読者の期待に応えています。

同じ大都市でも江戸では山と町並みが近接する風景は見られません。

都市の賑わいと背景の山容を一枚に描ける三条大橋を題材とした選択は大成功と言えます。

茶色に描かれた遠山は比叡山、その手前の山の中腹あたりに見える屋根は清水寺、その右下は法観寺 の五重塔(八坂の塔)です。

麓(ふもと)は密集する古都の町並みが描かれています。

三条大橋にはさまざまな人々が行き来しています。右手から行商の二人の旅人、番傘をさす武士、日 傘を下女に持たせた商家の娘、被衣(かずき)をかぶった公家の子女、菅笠(すげがさ)をかぶって 欄干にもたれかかって川を見下ろす男は気になります。

その後ろにいる箒(ほうき)を逆さに担いだような人物は茶筅(ちゃせん)売りです。

その左の一行は槍持(やりもち)を先頭に、長持(ながもち)を担ぐ人足、駕籠に乗った主人とその 家臣団です。

ここで目を引くのは茶筅売りの姿です。

京都らしさを演出する登場人物として茶道が盛んな京都の茶筅売りを描きこんでいます。

日本橋に始まり、三条大橋で終る『保永堂版』。

広重は東海道五拾三次の起点と終点を橋で揃えることで統一感を出しています。

『東海道五拾三次』という揃物が完結しましたので、ここではおめでたい句を選びました。

三条の橋を越えたる御慶かな(御慶=ぎょけい、年始にかわす挨拶)

森川許六(もりかわ きょりく) (1656-1715) 季語<御慶>で新年

茶筅から発想を得て私も詠んでみました。

新茶の香ふるまい玉露いただけり ^{白井芳雄} 季語<新茶>で初夏

今回は「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句-其ノ五 石薬師(三重県)から京師(京都府)まで」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典:安村敏信・岩崎均史著

『広重と歩こう 東海道五十三次』(小学館)(2000年) ISBN4-09-607001-7

町田市立国際版画美術館監修・佐々木守俊解説 『謎解き浮世絵叢書 歌川広重 保永堂版 東海道五拾三次』(二玄社)(2010年) ISBN 978-4-544-21201-3

小林忠・前田詩織解説 『歌川広重 東海道五十三次五種競演』(阿部出版)(2017年) ISBN 978-4-872-42443-0

新田時也編著・志田威・中澤麻衣著 『東海道・中山道 旅と暮らし』(静岡新聞社)(2019年) ISBN 978-4-783-81091-9

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修 『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社) ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』(角川学芸出版) ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』(角川学芸出版) ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』(角川学芸出版) ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』(角川学芸出版) ISBN 978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』(角川学芸出版) ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子 『日本の 365 日を愛おしむ』(東邦出版) ISBN 978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト:フリー百科事典ウィキペディア(Wikipedia)

足掛け八ヶ月、五回にわたり連載してまいりました-「歌川広重」『東海道五拾三次』保永堂版と俳句-最後までお読みいただき深謝申し上げます。

本シリーズを辛抱強く付き合ってくれた企画部の平田さん、ありがとう。感謝しています。次回メルマガは西洋画を取りあげます。よろしければまた、お付き合いください。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL: 06-6358-0141 FAX: 06-6358-0134 E-mail: info@tic-co.com